特許SDI×生成AI：ベンダー実装の現在地と今後のロードマップ



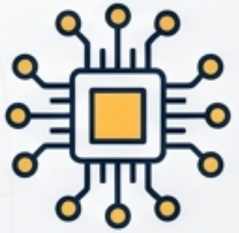
自動化は「半分」の真実

検索・要約機能への生成AI実装は進んだが、SDIの新着公報に対する「自動判定」を公式に実装する国内ツールはごく一部（サマリア等）に留まる。



大量仕分けは依然として「機械学習」

コストと処理ロジックの壁により、SDIの一次ノイズ除去は、生成AIではなく実績ある機械学習（PatentSQUARE等）が主力を担っている。



MCPとAIエージェントの台頭

2027〜2028年にかけ、企業内AIエージェントが複数DBを「部品」として呼び出すMCP連携への移行が始まる。

Gemini Notebook

業界の誤解：「生成AIがSDIを完全自動化した」は半分だけ正しい

期待される理想像

> 「2025〜2026年、主要特許DBが生成AIによる要約・関連度判定・検索式生成をSDIのワークフローに完全に組み込んだ」



一次ソース検証による現実

生成AI機能の「提供」は相次いでいる（日立 Shareresearch、JP-NET 等）。

しかし、SDIの「新着公報に対する自動処理」を公式に実装しているのは、国内ではパテント・インテグレーション「サマリア」のみ。

国内DBの多くは、依然として利用者が能動的に使う「検索・読解の機能」の段階に留まる。

Gemini Notebook

なぜ「判定」の自動化は遅れているのか？（SDIパイプライン分析）

検索式の生成（上流）

設計時に都度実行。JP-NETやOrbitなどが提供するが、SDI履歴からの「自動修正」は未実装。

要約（中流）—【実装が進む領域】

全件事前生成が主流。Patentfield（約8,000万件）、日立（約870万件）。公報ごとに一度作れば全利用者が共有できるため、DB側が一括処理しやすい。



関連度の判定（下流）—【壁】

監視テーマ別に基準が異なるため「新着のたびに都度実行」が必要。処理費用と「見落としリスク」の設計が障壁となり、SDIへの自動接続が進まない。

Gemini Notebook

SDI統合評価フレームワーク：4つの到達レベル



Gemini Notebook

国内ベンダーの現在地（既存DB vs AIネイティブ）

	AIネイティブ系	既存特許DB
Level A: 自動 (Auto)	サマリア（一括指示を自動実行。国内唯一）	—
Level B: 適用可 (Applicable)	Patentfield（AI分類予測・AIR, 手動）	PatentSQUARE（機械学習・自動） HYPAT-i2（機械学習）
Level C: 検索のみ (Search Only)	Tokkyo.Ai AI Samurai Amplified	Shareresearch（日立：AI要約・検索） JP-NET（生成AIオプション月額固定）
Level D: なし (None)	—	SRPARTNER, CyberPatent Desk, etc.

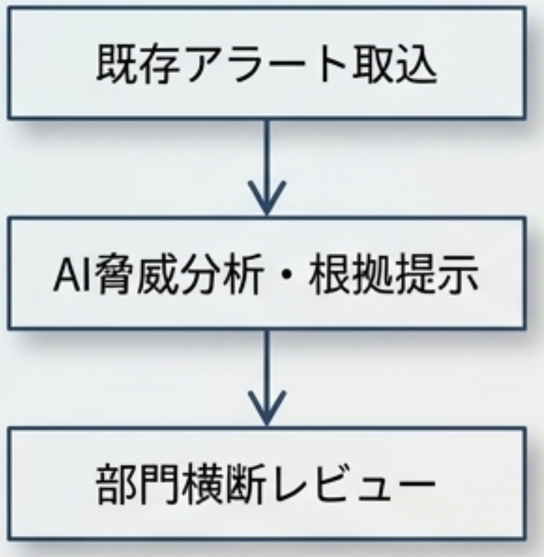
キーテイクアウェイ： サマリアが「検索式→定期取込→自動判定」を国内で唯一製品化。大手DB（日立・JPDS）は生成AI機能を搭載したものの、SDIへの自動接続は次の一手。

Gemini Notebook

海外ベンダーの現在地と先行する2つの「型」

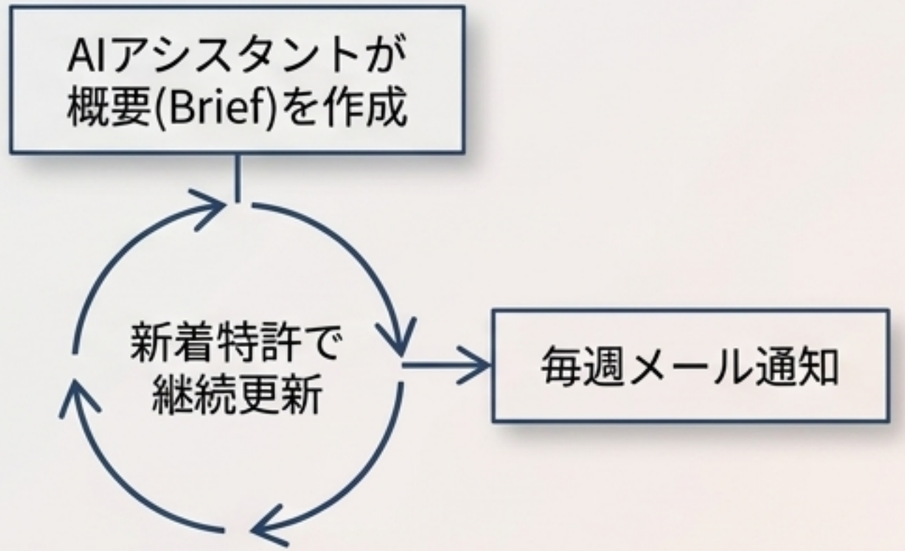
Level A: 自動 (Auto)	Derwent Patent Monitor　PatSnap (Eureka Pulse)
Level B: 適用可 (Applicable)	PatBase（機械学習）　Orbit Intelligence

ワークフロー型 (Derwent Patent Monitor)



FTO等の共同作業に特化。

ブリーフィング型 (PatSnap Eureka Pulse)



動向監視に特化。

Gemini Notebook

隠れた真実：大量仕分けにおける「機械学習」の優位性



機械学習（Machine Learning）

役割：一次仕分け・ノイズ除去
（PatentSQUARE, Patentfield等で稼働中）

- 高速かつ低コストでの大量処理が可能。
- 教師データによる堅牢な「○×」の2値分類。



生成AI（Generative AI）

役割：説明・要約・根拠提示

- 高度な推論と自然言語出力。
- しかし、都度実行のコストが高く、大規模な初期フィルタリングには不向き。

結論：「生成AIが機械学習を駆逐する」わけではない。
大量の一次仕分けは機械学習、精読支援は生成AIという『分業』が当面の最適解となる。

Gemini Notebook

ROIデータの罠：ベンダー公表値の読み解き方



警報：比較不能

Claim A: 確認時間 最大90%減

（日立）
Context: 生成AIの自社検証。従来の手動調査との比較であり条件により変動。

Claim B: 年1,800時間削減

（カネカ×PatentSQUARE）
Context: 機械学習（AI自動分類）の顧客事例であり、生成AIの効果ではない。発表時は見込み値。

Claim C: SDI工数 30〜40%削減

（コニカミノルタ×Patentfield）
Context: これも機械学習（AI分類予測）による実績。

⚠ **第三者検証の不在:** 現時点で、SDIに「生成AI」の判定を使った場合の【再現率（見落とし率）】を示した第三者の検証データは公表されていない。自社データでの検証が必須。

Gemini Notebook

2026〜2028年の進化ロードマップ

Wave 1: 現在〜2027年（標準化と拡張）

- 日本公報の「生成AI要約」が主要DBの標準機能として定着。
- 差別化の軸は、海外公報（特に中国）の要約・判定対応へ移行（JPDSのタイムラグ短縮等）。

Wave 2: 2027〜2028年（一括判定の普及）

- 「SDI取込 → 監視テーマ別の基準で生成AIが判定 → 根拠付きで配信」のフローが国内主要DBにも広く普及。

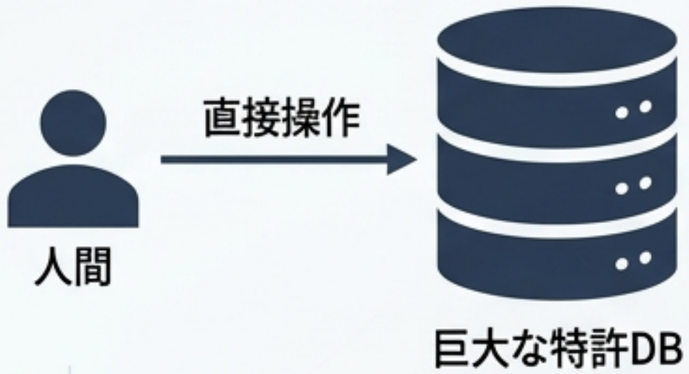
Wave 3: 2028年以降（アーキテクチャの転換）

- 次世代パラダイム「MCP」とAIエージェントの本格稼働（次スライドで詳細）。

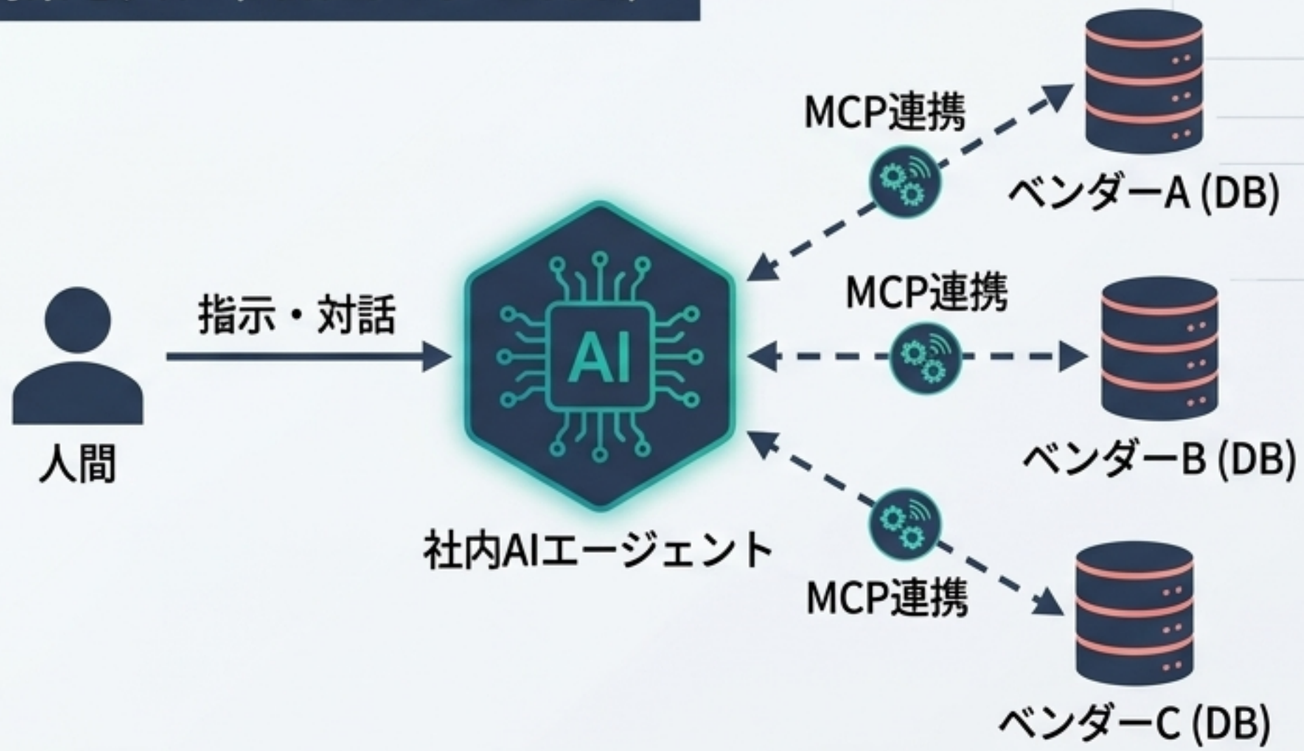
Gemini Notebook

次世代パラダイム：AIエージェントとMCP（Model Context Protocol）

現行モデル（Current Model）



将来モデル（Future MCP Model）



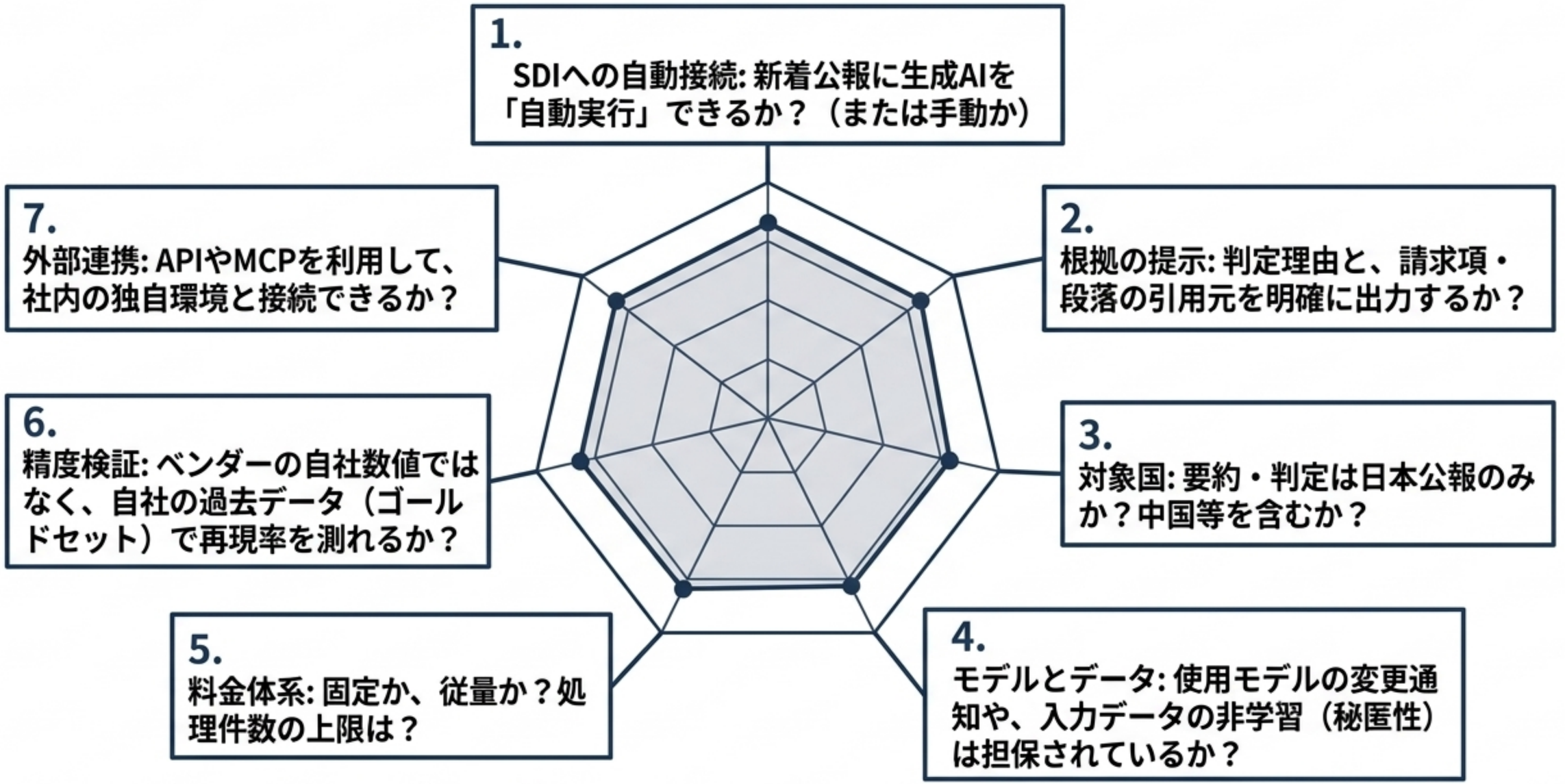
パラダイムシフト: 「人間がDBを操作する」時代から、「社内AIエージェントが複数DBを呼び出してSDIを組み立てる」時代へ。

兆し: サマリア（2026年9月MCP対応）、AI Samurai（SDIエージェント化）、PatSnap（MCP連携出展）。

戦略的意味: データベースは巨大なプラットフォームから、エージェントに呼び出される「部品（コンポーネント）」へと再定義される。

Gemini Notebook

導入のための実践フレームワーク：ベンダー評価 7つのチェックポイント



Gemini Notebook

安全な実装へのベストプラクティス

目的別の切り分け

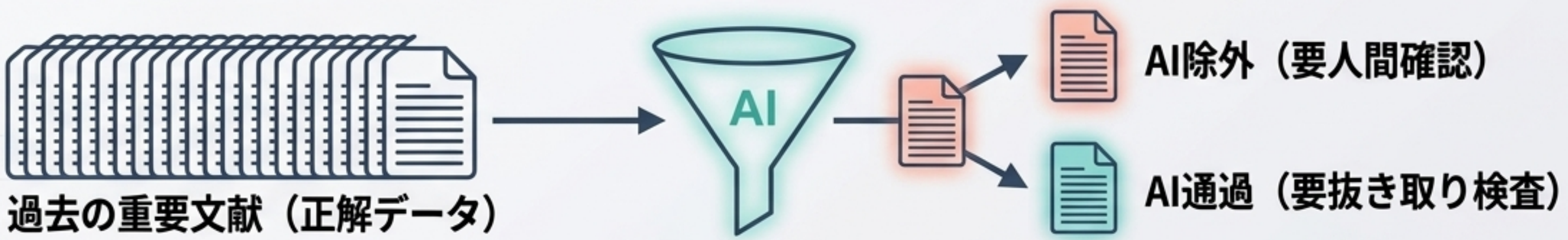
FTO（侵害予防）監視

AIは「並べ替え」と「根拠提示」までに留め、最終的な除外判断は人間が行う（リスク高）。

技術・競合動向の監視

AIの要約・分類をそのまま配信し、情報共有のスピードを優先（リスク低）。

「ゴールドセット」による検証



テーマごとに過去の重要文献（正解データ）を用意し、AIが除外した文献を抜き取り検査する。

⚠ 鉄則: 再現率が数値として証明されるまで、人間の再確認をやめない（数十万件の検証を経て再確認を廃止した島津製作所の事例に学ぶ）。

Gemini Notebook

結論：技術の進化と「戦略的選択」

生成AIによるSDIの「完全自動化」はまだ黎明期。過度な期待を排し、
現状の「分業（機械学習× 生成AI）」を正しく理解することが第一歩。

国内ツールでは「サマリア」が一歩リードするも、大手DBも追従中。
海外ツールのワークフロー型・ブリーフィング型が今後のベンチマークとなる。

数年後のMCP/エージェント化を見据え、特定のツールへの依存（ロックイン）を
避け、データと判定基準（プロンプト）の自社保有を進めるべきである。

**ツールは自動化されても、監視の「目的」と「判定基準」を設計するのは、
依然として人間の知財戦略である。**

Gemini Notebook